

ワークショップのご案内

一般社団法人日本箱庭療法学会第 39 回大会を京都大学（京都府京都市左京区）および Zoom（オンライン）にて開催いたします。今大会は、12 名の先生方にワークショップ講師をお引き受けいただくことができました。

ワークショップの形式は、講師に一任しています。コースによって、テーマに即した参加者からの事例提供を募集しています。詳細は各コース（A～L）の案内をご覧ください。

みなさまの積極的なご参加を心よりお待ちしております。

1. ワークショップ概要

日 時： 2026 年 10 月 31 日（土） 9:30～12:00（受付開始 9:00）

会 場： オンサイト：京都大学（京都府京都市左京区）

オンライン：Zoom

講 師： （50 音順・敬称略）

A	猪股 剛	（帝塚山学院大学／日本橋分析プラクシス）
B	岩宮 恵子	（島根大学・臨床心理相談室／にしきまちオフィス）
C	梅村 高太郎	（京都大学大学院教育学研究科）
D	河合 俊雄	（京都こころ研究所）
E	川崎 克哲	（学習院大学）
F	北口 雄一	（北口分析プラクシス）
G	桑原 知子	（放送大学）
H	高石 恭子	（甲南大学）
I	田熊 友紀子	（代官山心理・分析オフィス）
J	田中 康裕	（京都大学大学院教育学研究科）
K	畑中 千紘	（京都大学大学院教育学研究科）
L	松下 姫歌	（京都大学）

受 講 費：

	A 〔7月31日15:00までに お申し込みの方〕	B 〔8月3日9:30以降に お申し込みの方〕
会 員	6,000 円	7,000 円
非会員	8,000 円	9,000 円

受 講 資 格： 一般社団法人日本箱庭療法学会正会員。もしくは臨床心理士の有資格者、臨床心理学を学んでいる大学院生、臨床心理学およびその関連領域で実践的な仕事に従事されている方で、心理臨床事例に関する守秘義務を遵守できる方。

2. ワークショップ・コースのご案内

A ユング派の絵画療法

講 師: 猪股 剛（帝塚山学院大学／日本橋分析プラクシス）

内 容: イングリッド・リーデル『ユング派の絵画療法』（2026年6月刊行、創元社、猪股剛訳）から、1. ユング派の絵画療法の基礎、2. 絵画療法の事例、3. グループでの展開、という三点を紹介し解説する。ユング派の絵画療法は、アクティブ・イマジネーションからはじまり、そこでイメージされたものを実際の絵画の形に実現し展開させていくことによって成立する。つまり、言語化することができない象徴水準にあるものが、イマジネーションと制作によって姿を表すのである。そして、その後の心理療法的な対話を通じて、それが心の中で生きたものとなっていくプロセスがユング派の絵画療法の基本的なあり方である。このワークショップでは、そのことをていねいに解説すると共に、後半30分は、参加者からの質問に応じていく質疑応答の時間としたいと考えている。

事例提供者: 書籍の中に紹介されている事例を扱います。

B 無気力の奥に潜む水脈—描画が示す静かな内的変化

講 師: 岩宮 恵子（島根大学・臨床心理相談室／にしきまちオフィス）

内 容: 青年期の「動けなさ」は、ときに外側からは停滞そのものとして映る。「もうすぐ何か動き出すのか」「それとも当分はこのままなのか」周囲には判断しがたい時間だけが淡々と流れていく。しかし、本人の内側では別の時間が、別の速度で、少しずつ形を変えながら進んでいることがある。この、表層には現れない静かな水脈の発見こそ、しばしば青年期臨床の核心となる。今回は、うつ状態を主訴として来談し、意味のあることには取り組めないという無気力のなかに沈み込んでいたクライアントが、就職という節目に至るまでにたどった経過を追っていく。現実的な変化が目に見えにくいなかで、スクイグル、MSSM、LMTといった描画を媒介とした面接過程において、クライアントはどのように自分のなかにある水脈を見出していったのだろうか。描かれた線や投影されたもの、そして構図の選択などが、本人の内面の流れや自己の位置づけの変化をどんな形で示していたのか—描画の推移を丁寧にたどりながら、無気力の奥で静かに進行していた内的な変化の姿をフロアのみなさんとともに立ち上げていければと思う。

事例提供者: 佐々布 亜希子氏

C 心理療法における物語創作の臨床的意義——フィクションの可能性と限界

講 師: 梅村 高太郎（京都大学大学院教育学研究科）

内 容: 河合隼雄が折りに触れて述べたように、心理療法の役割は、クライアントが自分の物語を発見し、それを生きていくことができるような場を提供することに他ならない。通常、クライアントは心理面接のなかで、自らの生活史や実体験に基づく「ノンフィクション」としてその物語を紡いでいく。しかし、時に自身の現実とは直接のつながりを持たない「フィクション」——オリジナル小説や二次創作など——を生み出すことで、自らの物語を模索しようとするところがある。こうした物語創作という営みは、新たな現実性を創り出す契機となる反面で、単なる自我的な願望表現に留まり、クライアントを真に動かす力を持たず、むしろ変容を阻むものともなりうる。本ワークショップでは、こうした心理療法過程においてクライアントが行う物語創作の可能性、あるいは限界について、箱庭療法をはじめとしたイメージ・表現技法と比較参照しながら論じたい。この作業は、物語創作の特徴を明らかにするだけでなく、他のイメージ技法の特徴をも改めて問い直す機会ともなるだろう。その上で、参加者から事例をご提供いただ

き、本テーマについてさらに実践的な理解を深めたい。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

物語の創作がテーマとなる事例（上記概要に触発されたものであれば、広く考えていただいてもかまわない）

D イメージにおける相互浸透と他者性

講 師： 河合 俊雄（京都こころ研究所）

内 容： 心理療法で扱われるイメージは、クライアントの閉じられた内面としてのこころのなかで生じることを前提としている。従ってイメージは、時間・場所を設定する治療枠のさらに内側にある枠として機能することもある。ところが身体症状を持つ人や、ASD 圏の人などにおいては、イメージが現実やセラピストとつながって相互浸透を起こし、それが大きな変化につながることもあるので、イメージにおけるインターフェイスする働きに注目して検討したい。

参考文献：河合俊雄『夢とこころの古層』（創元社）

事例提供者： 城谷 仁美氏

E 語りのスタイルとコンテンツループものと発達障害との関連を中心に

講 師： 川崎 克哲（学習院大学）

内 容： 明治時代の中期から末期にかけて、二葉亭四迷『浮雲』を経て島崎藤村『破戒』に至る過程で、日本語における「言文一致体」という表現様式はほぼ完成をみる。このスタイルの確立は、人間の内面や風景の描写を可能にし、いわゆる近代的主体の形成と密接に関連する文学的コンテンツを生み出す基盤となった。一方で、これとある種の並行関係にあるものとして、「ゲーム的リアリズム」（東浩紀）という語りのスタイルを考えることができる。これはマルチエンディング作品に典型的に見られるように、複数の選択肢を同時に開き続けることができる、きわめて現代的なスタイルである。この様式には、唯一の「これ性」、「かけがえのない選択」が成立しないという特徴があり、その意味で、発達障害的な世界認識と深く共鳴している。この「複数の選択肢を同時に保持し得る」という空間的特徴を、時間的連続性へと展開したものが、いわゆる「ループもの」と呼ばれる物語類型であると言える。ループ構造は発達障害の経験世界と深い接点を持っている。本ワークショップでは、こうした語りのスタイルおよびコンテンツを手がかりとして、発達障害に特徴的な世界の捉え方、その世界における苦悩の質、さらには、その苦悩から抜け出す可能性について検討を試みる。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

事例は、「ループ」的要素が見られる事例、あるいはループものとは直接関係しないものの、発達障害に関わる事例を募集いたします。

F 「言葉」と共にいること

講 師： 北口 雄一（北口分析プラクシス）

内 容： 描画や夢において、わたしたちは相手のあり方を理解したり、生じうる危険性をアセスメントしたりしています。相手からの「言葉」においても、同じ態度であるはずですが、「言葉」には威力がありますので（たとえば死に関する言葉、攻撃されるとき言葉など）、わたしたちは「言葉」に動揺し、怖さを感じ、心配し、傷つき、または怒ることが、面接の中では多々生じます。しかし、ある人とある人が、上記の動揺や怖さが生じる同じ「言葉」を口にしたとしても、それらの人のあり方が違えば、額面上は同じ「言葉」でも意味するところや、クライアントに

生じている危機の水準は、かなり違います。その違いをより理解することによって、わたしたちは「言葉」とときには向き合い、ときには共にいることもできます。今回は、「言葉」と違いの理解についてテーマにしたいと思います。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

今回のテーマで頭に浮かぶ事例のご応募を、お願いします。

G 箱庭やイメージに「触れる」こと

講 師： 桑原 知子（放送大学）

内 容： 作成される、あるいは作成された箱庭、描かれた描画、報告される夢などに対して、セラピストはどのように「接する」のだろうか。「二人」の間におかれた箱庭や描画、そして夢などに対して、セラピストあるいはクライアントは、「触れる」ことができるのだろうか。箱庭療法においては、「見守り手」として「見守る」という触れ方が一般的である。（しかし時には、セラピストがともに箱庭を作ることもある。）「見守る」とはどのような触れ方なのだろう。一方で、プレイセラピーでは、セラピストは、クライアントに触れ、遊びにも参画する。カウンセリングにおいては、触ってはいないものの、お互いの「こころ」に触れているのかもしれない。今回のワークショップにおいては、心理臨床における、こうした「触れる」ということについて、考えてみたい。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

どんな場でおこなわれたものでもかまいませんし、1回のセッションのものでもかまいません。事例報告でなくても、「こういうことで悩んだ、どうすればよかったのか」などの質問や、エピソードでもかまいません。

H イメージ体験とことばをつなぐ

講 師： 高石 恭子（甲南大学）

内 容： 箱庭、描画、造形などを用いた表現療法を行うとき、言語的洞察を経ずにクライアントの回復や成長のプロセスが展開しうることを私たちは経験的に知っています。早急な言語化を避け、イメージはイメージのまま、ことばにならない世界を共に味わい体験する姿勢が大切なのは確かです。しかし、言語を介さないですむ例は稀です。多くの場合、私たちはそこで何が生じているのか、自分が理解するため、クライアントと語るため、さらにその場にはいない他者に説明するため、イメージ体験をことばにする努力が求められます。それぞれの局面で、うまくことばにならなかったり、言い過ぎてしまったり、もどかしさを抱えることがあるのではないのでしょうか。本コースでは、実際の事例で表現された作品を味わい、そこから何が語れるか、参加者全員でイメージ体験とことばをつなぐ力を磨く試みをしてみます。その作業によって、事例理解がどのように豊かに広がるかを実感していただけたらと思います。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

表現療法の導入によって展開が促された事例を募集します。現場領域や対象年代は問いません。作品は1、2点でも、長期事例の中のシリーズ（多数）でも構いません。ぜひお申し出ください。

I 「殺害」の遊びを考える

講 師: 田熊 友紀子 (代官山心理・分析オフィス)

内 容: 子どものプレイセラピーの中で、しばしば激しい攻撃や殺害の遊びが展開することがある。激しい攻撃性の背後には甘えへの希求が、また死の後に再生が生じる可能性が感じられることで、セラピストはこれらの遊びを受け止め見守ることができ、セラピストとの関係性を支えにこれらの遊びが治療的に働くと考えられる。しかし、これらの攻撃や殺害がセラピストに執拗に繰り返される中で、これらの意味や可能性、そして関係性について疑念や不安、限界を感じることもあるかもしれない。セラピストへの攻撃や殺害にはどのような意味があり、セラピストはいかにそれと向き合い、その中で生き残るべきかあるいは死に切るべきなのか？その場で判断していくことにさまざまな難しさを感じるだろう。本ワークショップでは、児童養護施設でのプレイセラピーをとりあげる。人生早期から他者を脅威と体験し、自閉的な世界へと固執することで自己を守ってきたクライアントにとって、脅威的な他者としてのセラピストを「殺す」ことがどのような意味を持ち、それらの表現が次第に緩んでいった要因はなんだったのか。事例を通じて考えてみたい。

事例提供者: 北野 里果氏

J 青年期における「自己封入」とその「突破」:学生相談の一事例から

講 師: 田中 康裕 (京都大学大学院教育学研究科)

内 容: 対人恐怖のような神経症的な自意識に悩む青年の事例は、今日の学生相談においては少なくなり、むしろ不安であったり困っていたりはするが「悩めない大学生」が増えていると言われている。そのように「不安」が、精神「症状」化しえない、そして「悩み」として結晶化しえない心理的背景には、彼らの「自意識」の質の変化が関係しているように思われる。このような今日的な自意識の在り方を、自意識の狭いループに囚われた「自己封入」と捉え、そこからの「突破」がいかにして果たされうるのかを、心理相談室 風花 (かざはな) の南部勝彦氏による夢・箱庭・描画等のイメージ表現を用いた心理療法の事例から考えてみたい。

事例提供者: 南部 勝彦氏

K 現代の対人恐怖心性を考える

講 師: 畑中 千紘 (京都大学大学院教育学研究科)

内 容: 対人恐怖は日本文化に根ざした症状として知られ、1950~60年代の日本社会において、特に若者世代に多くみられたものである。1967年にとられた大学の全新入生対象の調査では「赤面しやすい」と答えた学生が約4割、「他人の視線が気になる」と答えた学生が3割超と、健常者における対人恐怖傾向も非常に高かったようである。対人恐怖はその後、ふれあい恐怖などの形に軽症化した後、臨床的にはそれほど高い注目を浴びてきたわけではないが、現在でも「人が怖い」と訴える若者世代のクライアントは多い。現実的な他者が怖いというよりも、対人的状況に対する不安や自己注目の高さなどが背景にあることも多く、かつての対人恐怖と近い特徴もみられるいっぽう、赤面や視線恐怖などの形で症状が出現することは少なく、対人恐怖心性が時代に応じて変化してきていることも示唆されている。本ワークショップでは若者世代を対象に行った縦断的研究などについて紹介すると共に、京都大学人と社会の未来研究院の粉川尚枝氏に事例提供をお願いし、現代の若者世代の対人恐怖心性がどのように現れ、変化していくのかについて検討を行いたい。

事例提供者: 粉川 尚枝氏

L 統合失調症のバウムの長期的プロセスの検討:

人の普遍的な心的治癒力を見出す方法としてのバウムテストの再評価

講師：松下 姫歌（京都大学）

内容：どのような状態にあっても、本人を動かし生かしているのは心である。しかし、本人を動かし生かす働きとしての心は、必ずしも本人の意識の正面には見えてこない。そのような次元の心が動き語り出すことに、描画法は寄与しうる(松下, 2023)。描画法は、描画を通じて自らの心的テーマとの対話が展開する、それ自体、心理療法的構造を備えたアプローチ法である(松下, 2023)からである。今回は、統合失調症を有する患者・クライアントのバウムを取り上げたい。彼ら彼女らのバウムは、統合失調症の心を教えてくれるだけでなく、むしろ、どの人の心にも備わっている、普遍的な働きを、ミクロの次元で詳細に見せてくれるからである。具体的には、彼ら彼女らがそれぞれ長期にわたり、継続的に描き続けたバウムのシリーズをいくつかとりあげたい。統合失調症に特異的に見られる幹上開やメビウスの木(山中, 1976)や妄想的に見えるバウムが、長期的にはどのようなプロセスを辿り、その中でどのような心的治癒の動きが見られるのかを検討したい。そのことによって、統合失調症の理解を深めることに加え、バウムに表現される普遍的な心の働きそのものについて検討することを目指したい。

事例提供者：講師自身が事例を提供する

3. ワークショップの受講申し込み

ワークショップの参加申し込みは、別紙「第1号通信」を参考に以下の要領でお申し込みください。

1. 学会ホームページまたは、右記QRコードの申し込みフォームより、ご希望のワークショップを選択し、お申し込みください。

先着順での受付となりますため、定員になったワークショップから締切とさせていただきます。また、会場の定員数により、ご希望のワークショップにご参加いただけない場合もございますので、あらかじめご了承ください。



2. 参加者情報のご登録後、諸費用をカード決済でお支払いください。

ご登録後、別日にお支払いされる場合は自動返信メールの内容をご確認の上、入金締切日までに諸費用をカード決済でお支払いください。

なお、お支払いされた諸費用は、事情の有無に関わらず返金いたしませんので、あらかじめご了承ください。

3. 9月30日(水)17:00までにご登録・お支払いいただいたオンサイト参加者には、事前に名札等を発送いたします。9月30日(水)17:00以降にご登録・お支払いいただいた場合は、会場にてお渡しいたしますので受付にお立ち寄りください。

4. ワークショップの事例発表申し込み

1. 希望するワークショップ・コースが事例を募集している場合にのみお申し込みいただけます。
2. 参加申し込みの際、事例発表申し込み欄に必要事項を入力し、2026年4月20日(月)までにお申し込みください。

3. 事例発表の申し込みが多数あった場合は、講師と相談の上、選択しますのであらかじめご了承ください。

5. 研修ポイントについて

ワークショップ、シンポジウムの両方に参加された方には、日本臨床心理士資格認定協会「臨床心理士教育・研修規程別項」第2条(3)「本協会が認める関連学会での諸活動への参加」の通り、ポイントが付与されます。詳細は、第1号通信6頁の「4.研修ポイントについて」をご参照ください。

**一般社団法人日本箱庭療法学会
第 39 回大会ワークショップに関するお問い合わせ・連絡先**

■一般社団法人日本箱庭療法学会 第 39 回大会準備委員会

E-mail : hakoniwa39th@a-youme.jp

住所 : 〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1 丁目 4 番 8 号

日栄ビル 703A あゆみコーポレーション内

*お問い合わせやご連絡は E メールでお願いいたします。